

大木文楽人形劇

木大文楽人形劇全集 越興行

(り替日五題外) 候り仕續演でま日四月八付に評好



胃腸疾患

ルエ

ヒオオゲン錠

ライオン製薬株式会社



◆額半等各りに体園の生學◆

八五七・七五七座銀話電

第四回外題 (十六日より二十日まで)

第四回に限り特に三時開演

情報局国民演劇参加作品

狂言し義 經 千 本 櫻

堀川夜討、大物浦
吉野落

伏見稻荷の森より川連法眼館の段迄

伏見	源義經	竹本七五三	伏見	源義經	竹本七五三
稻荷	佐藤四郎	竹本義太夫	稲荷	佐藤四郎	竹本義太夫
静	兵衛忠信	竹本濱太夫	静	兵衛忠信	竹本濱太夫
別れ	武藏坊	竹本隅若太夫	別れ	武藏坊	竹本隅若太夫
の段	藤見藤太	竹本松島太夫	の段	藤見藤太	竹本松島太夫
	藤井六郎	竹本津麿太夫		藤井六郎	竹本津麿太夫
	藤河次郎	竹本千駒太夫		藤河次郎	竹本千駒太夫
嵯峨	中	竹本宮太夫	嵯峨	中	竹本宮太夫
庵室の段	野澤吉五郎	竹本越名太夫	庵室の段	野澤吉五郎	竹本越名太夫
椎の木	豊竹三郎	竹本大隅太夫	椎の木	豊竹三郎	竹本大隅太夫
の段	豊竹清二郎	竹本清二太夫	の段	豊竹清二郎	竹本清二太夫
主馬小金吾	豊竹仙太夫	竹本宮太夫	主馬小金吾	豊竹仙太夫	竹本宮太夫
討死の段	豊竹清六	竹本古親太夫	討死の段	豊竹清六	竹本古親太夫
釣瓶	豊竹清六	竹本古親太夫	釣瓶	豊竹清六	竹本古親太夫
壽し屋の段	豊竹清六	竹本古親太夫	壽し屋の段	豊竹清六	竹本古親太夫

目段一	目段二	目段三	目段四
伏見稻荷静別れの段	嵯峨庵室の段	椎の木の段	主馬小金吾討死の段
武藏坊源義經	武藏坊源義經	武藏坊源義經	武藏坊源義經
河井六郎	河井六郎	河井六郎	河井六郎
藤見藤太	藤見藤太	藤見藤太	藤見藤太
兵衛忠信	兵衛忠信	兵衛忠信	兵衛忠信
吉野落	吉野落	吉野落	吉野落
堀川夜討	堀川夜討	堀川夜討	堀川夜討
大物浦	大物浦	大物浦	大物浦

新橋演舞場

(む含を割九税内) 観五十三圓七 等一
(同割六同) 圓 四 等二
(同割六同) 観十四圓二 等三
(同割四同) 観十圓一 階參
料場入御 (共税)

大後文樂瘦 人秋淨瑠羅屋

全頁幻戲樂行



第四回

新橋橫舞場

親切感謝明る帝都

愛國百人一首

初春の初日かゞよふ神國の神のみかけをあふげもろもろ

荒木田久老

八束穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも

橘千蔭

香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり

上田秋成

かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しさ

栗田士滿

遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみぢ葉

蒲生君平

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらずな

賀茂季鷹

青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよ此の正道を

平田篤胤

一方に靡きそろひて花すゝき風吹く時ぞみだれざりける

香川景樹

安見しゝわが大君のしきませる御國ゆたかに春は來にけり

大倉鷺夫

かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや

藤田東湖

大阪 文樂座人形浄瑠璃芝居

吉例全員引越興行

第四回外題

(二十六日より
二十日まで)

情報局國民演劇參加作品

通し
狂言

義經千本櫻

伏見稻荷の森の段
 嵯峨庵室の段
 椎の木 of 段
 小金吾討死の段
 釣瓶壽しの段
 道行初音の旅路
 川連法眼館の段



◇ 座各竹松の月七 ◇

明 治 座	東 京 劇 場	歌 舞 伎 座
<p>一 お目見得だんまり 一 幕</p> <p>二 赤穂義士審判 三 幕</p> <p>三 道行初音旅 常磐津連中 竹本連中</p> <p>四 東海道中膝栗毛 三 幕</p>	<p>一 幻燈部屋 三 幕</p> <p>二 上羽の雨 長唄連中 下五月の雫</p> <p>三 み民われら 三 幕</p>	<p>一 妹背山婦女庭訓 御殿の場</p> <p>二 素梅落 竹本連中</p> <p>三 一本刀土俵入 二 幕</p> <p>四 玉屋 清元連中</p>
<p>七月興行大歌舞伎</p>	<p>藝術座水谷八重子一座</p> <p>日曜晝間興行十一時</p>	<p>恒例尾上菊五郎一座</p> <p>喜多村綠郎 加入 大谷友右衛門</p> <p>毎夕四時・日曜晝間興行十一時</p>
<p>七・六〇</p> <p>四・〇〇</p> <p>二・四〇</p> <p>一・二〇</p>	<p>六・六五</p> <p>三・六八</p> <p>二・〇八</p> <p>一・二〇</p>	<p>御 観 劇 料 (税 共)</p> <p>九・四〇</p> <p>六・七〇</p> <p>四・〇〇</p> <p>二・四〇</p> <p>一・一〇</p>

決戦下服装に就き

皆様へ御願ひ

今こそ決戦、一億總蹶起の時、擧げてしまふの氣概に燃へて戦争生活の實踐に徹底せねばなりません。演劇、演藝、映畫亦決戦下必要不可欠な戦争生活の一部面であることは今更申すまでもなく、隨て御觀覽は戦争生活の一部であり延長であります。

既に戦争生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服装等飽くまで國家の要求に融け込まなければならぬと存じます。

従來、御觀覽の場合、動もすれば服装華美に流れ過ぎると云はれました。平時なら兎も角、此の決戦下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様御集りの劇場ですから服装は格別目立つな服装を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戦下必要不可欠の健全娛樂を御覽下さいませう。

新調は
見合せ
今後の衣
生活は
かうしま
しよろ

のでありまして、その場合の服装が時代の流行を作るときへ云はれました、事實そうだったのであります。

だから今日御集り下さる皆様は服装の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召して、總て決戦下にふさはしい服装を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り逞ましい日本人の心意氣となつて決戦下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

どうぞ皆様。これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも绚烂華美などと云ふ舊觀念を美事一蹴し、簡素、剛健、明朗

松竹株式会社

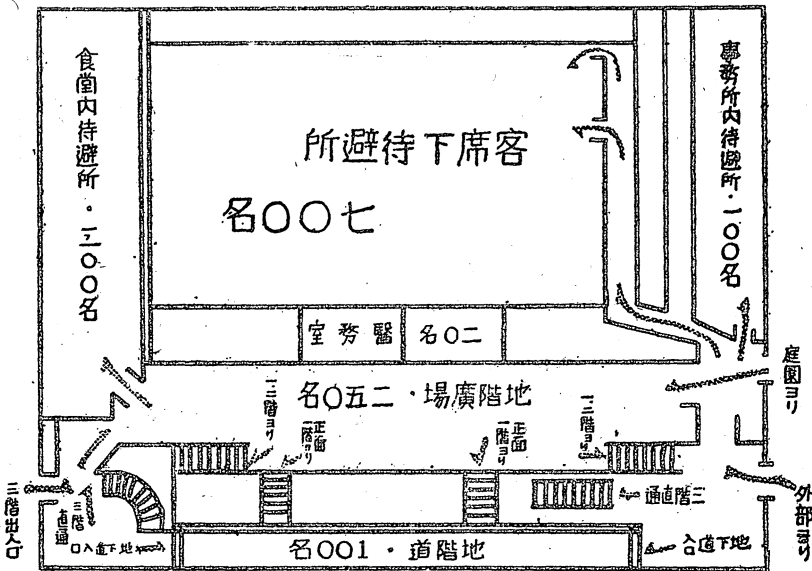
東京興行者協會

戰時下興行場ニ於ケル防空上

ノ措置要綱

○空襲警報發令に依り各興行場の興行中止の際に於ける入場券の取扱に關する件

- 一、興行開始ノ前賣入場券等ノ入場料ハ原則トシテ拂戻（現金）ヲ爲スコト 但シ相手方ノ承諾ヲ受ケ次回興行ヲ開始シタル日又ハ特ニ指定シタル日ノ興行ニ其ノ入場券等ヲ有効トシテ入場セシムルコト
前項ノ拂戻ハ警報解除後爲スコト
 - 二、興行開始後ノ入場料ハ拂戻（現金）ヲ爲ササルコト
 - 三、興行開始中興行ヲ中止シタル時ハ其ノ中止時期ガ一回興行ニ要スル時間ノ概ネ三分ノ二ヲ經過セサル場合ハ其ノ入場券等ヲ以テ再入場又ハ割引入場ヲ爲サシムルコト
但シ假設興行、巡回興行又ハ空襲ニ依リ興行場被害ヲ受ケ其ノ他興行再開不能ナル時ハ其ノ入場券ハ無効トス
 - 四、再入場ハ次回同種興行ヲナス時ハ残存番組ノ興行ニ限リ有効トス
 - 五、割引入場料ハ其ノ入場券等ノ料金ノ半額以下トシ次回興行ノ全番組ヲ觀賞セシムルコト
- 其の他當局より興行時間入場人員及入場料に關し特に指示ありたる時は其の指示に依ること



乍 憚 口 上

御ひるき皆々様彌々御清祥の段大慶至極に奉存候 扱て當る七月興
行の儀は當場吉例により大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有
の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふことと相成り候

今度も太夫、三味線、人形遣全員上京致し名曲數々選擇の上豪華
麗なる配列をなし十分に古典の妙味を發揮致す事に苦心罷在候へば
必ずや御期待に添ひ得るものと確信仕候 何卒倍舊の御引立を以て
陸續御來場の上御批判御評判の程伏て奉懇願候

昭和十八年七月吉日

文 樂 座 敬白

昭和十八年七月一日初日

毎夕四時開演

外題 五日目替り

◎各等學生團體に限り半額

御 觀 劇 料

- 一 等：(御一名)：七圓三十五錢(發九割共)
- 二 等：(御一名)：四 圓(同六割共)
- 三 等：(御一名)：二圓四十 錢(同)
- 三 階：(御一名)：一圓十 錢(同四割共)

切符取扱所
銀座地下鐵街芝居切符賣場
電話銀座一八一七六九七〇
ブレイガイド各店取扱
銀座本店電話京橋 五〇〇一 一より
五〇〇一 三まで

切符賣場用 電話銀座 七五七
事務所用 電話銀座 七五八
お客用 電話銀座 一九〇

木挽町

新橋演舞場

文 樂 鑑 賞 手 引

文樂の鑑賞に役立ちそうなことを、
簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織
とその由来——舞臺のこと——人形の
遣ひ方のこと——だいたい、そんな順
序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つ
の傳存劇團になつてしまつた。地方的
郷土的にはほかにもあるが、常設劇場
を有するものと云つてはない。けれど
も、文樂は寛政年度、おほよそ百五十
年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつ
て大阪に生れた劇場である。

この三四十年来、殆ど本邦唯一の人形
劇團なのであつて見れば、「文樂」が
「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうに
なつたのも當然でせう。古い所では、
江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝
居があつて、歌舞伎に對抗し、時とし
ては、享保から寶暦あたりまでは、つ
まり二百年前には、人形芝居のほうが
盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと云はれ
る。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線
唄きと人形遣ひの三者によつて組織さ
れてゐるからである。ところで、この
三者は、初めから一緒に生れて發達し

て來たかといふに、さうではなかつた。
人形を遣ふといふこと、これはさう
つと古くからありました。記録にあら
はれた所では、遠く平安時代に傀儡子
(くぐつまはし)といふものが見える
傀儡子は、支那の西方、中央アジア地
方から漂遊して來た街頭演藝人であつ
たらしく、平安時代とあれば約一千年
の前のことにある。淨瑠璃は足利時代
中期の發生となつてゐるから、五百年
の歴史と云へるでせう。これに對して
三味線は永祿中に、琉球から泉州堺港
に輸入された蛇皮線の本邦化なのであ
るから、ザツと三百七八十年前の舶來
樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが

提携し、慶長の初年あたりは、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、云はば立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み作者近松門左衛門を得て、戯曲の展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線による演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これ

も歴史的に云ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がかりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し

文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載さ

れてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた。慶長以前の傀儡子時代の、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何と何と使ふやうになつた。現今の大坂

文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、その以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

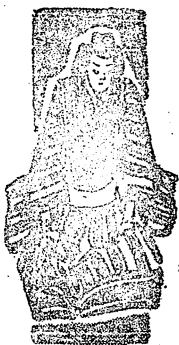
また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃は、特別の

場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はず、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひはりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。

けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)



伏見稻荷の森の段

情報局國民演劇參加作品

通し義經千本櫻
狂言

伏見稻荷の森より川連法眼館の段迄

九郎判官源義經 竹本七五三大夫

靜御前 竹本雛太夫

佐藤四郎兵衛忠信 竹本濱太夫

速見藤太 竹本隅若太夫

武藏坊辨慶 豊竹松島太夫

龜井六郎 竹本津麿太夫

駿河次郎 豊竹千駒太夫

鶴澤綱造

解説

義太夫淨瑠璃と云へば「忠臣蔵」「菅原傳授」「千本櫻」と先づ指折り數へられるのが此の「義經千本櫻」であります。

源九郎義經の登場する戯曲は枚擧にいとま無い程數多くありますが、中でも古くから最も有名な、最も人氣のある作がこの一編であります。

「菅原」が初演された翌年、「忠臣蔵」が初演された前年、即ち延享四年十一月の竹本座の勾欄に書卸されたもので、作は同じく竹田出雲、三好松治、並木千柳の三人の合作であります。

合作と云ふのは、各作者がそれ／＼相談

の上、執筆の受持ちの場を決め、立作者の立てた荒筋に従つて各人趣向を立て、腕を競つて全段をまとめ上げるのであります。

そのため、各段各様に異つた趣きを納めることが出来、全編とすれば多様な千變萬化の筋の起伏を見ることが出来ます。この淨瑠璃が出来た當時の竹本座は、出雲、松洛、千柳、と云ふ腕達者を揃へて居り、立作者の出雲の戯曲構成の技術も爛熟した時代であり、合作物としてかく相ついで名作が生れ出たのは偶然のことではありませぬ。今回當文樂座一行により引きつゞいて、「忠臣蔵」「菅原」「千本櫻」等の上演を見ますのも、國粹藝術の代表作と云ふ意を籠めたものであります。

— 人 形 —

九郎判官源義經 桐竹龜松

武藏坊辨慶 吉田玉徳

龜井六郎 桐竹紋太郎

駿河次郎 吉田多三郎

靜御前 吉田文五郎

狐忠信 吉田玉助

速見藤太 桐竹紋司

軍兵大ぜい

此處に忘れることの出来ないのは、これらの作が初演された當時の人物遣の名人吉田文三郎の存在であります。彼の残しました人形の幾多の型は長く後世の模範となり、今に踏襲されて居ります。即ち「夏祭りが上演された折には、人形に初めて帷子の衣装を用ひ、「菅原」では、松王、松王、櫻丸の今日の衣装を考案し、今回上演の「千本櫻」では狐忠信の源氏車の衣装を工夫したのは、總てこの文三郎で、彼の技術がたゞ人形衣装の工夫にのみ止まらず、人形劇の演出に與つて力あつた事は察するに餘りあります。人形淨瑠璃の發達の歴史に於て、作者、太夫、三味線の名人の輩出は申すまでもありませんが人形遣の名人吉田文三郎の名を忘れることは出来ません。今日流行して居ります曲目の主なものは、ほとんど、かゝる淨瑠璃の黄金時代の作品であることは尤もと肯ける所であります。

「菅原」「千本櫻」と續いての名作の上演に因み、右附言致して置きます。

さて、「義經千本櫻」は、外題は義經中心の作の様でありますが、内容は壇の浦で没落した平家の後日譚と云ふ方が當つて居り、義經を討取り源氏に復讐せんとする平家の、新中納言知盛、三位中將維盛、能登守教經等の世を忍ぶ姿を描き、花と散つた平家の人々の末路にかぎりない同情の眼をそゝいで居ります。

全編は五段、即ち、大序は大内の場で、平家を滅した義經が、左大臣朝方から勅詔の名に於て兄頼朝を討てとの謔をかけた初音の鼓を拜領し、止むを得ず一生鼓は打たぬ決心をして退下する。中は北嵯峨の庵室で、世を忍ぶ維盛の御臺若葉の内侍が夫維盛が高野山に居るのを聞いて六代君と共に小金吾を従へて發足する。切は川連上使、二段目は、口が伏見稻荷の鳥居前、靜御前が義經から形見として初音の鼓と着背長を賜り、狐の忠信は靜の供をして義經と別れる。中渡海屋から切の大物ケ浦。今回の上演は二段目からであります。三段目は口の椎の木、小金吾討死、切が鮎屋。四段目は

「道行初音旅」で吉野山へ義經を慕つて行く静と忠信の道行。吉野藏王堂の衆徒たちの評議の件があつて中から切が川逆法眼館になり、狐の忠信が正體を現はす件から、横河覺範實は能登守教經と義經との出會があり五段目は吉野山の段で、義經と名乗つて忠信が鎌倉方の者や覺範と戦ひ、よつて源九郎狐の通力に折柄繩にかゝつて来た元兇朝方を覺範は平家の敵と首を討ち、又覺範も忠信に討たれる。と云ふので結んで居ります。

梗概

伏見稻荷の森の段

昨日は北關の守護、今日は都を落人の九郎義經は、主従僅か數人にて此所迄來ると、龜井六郎が追ひつき、勝に乗つたる鎌倉勢が、押し寄せ來たつたと告げるので、一同は今一ト合戦と進り立つたが、義經は親兄の禮を説いて

これを止めた。

ト、大薙刀をかい込んだ辨慶も亦既け着け來り、かねて義經の不興をうけてゐたが、一同のとりなしに漸く手討ちを免れる時、義經の跡を慕ふて靜御前も姿を見せた。そして靜は、何處までも御供をと喚くが、駿河等は、忍びく／＼の御旅なれば、御同行は叶ふまじるとき諭す。義經もいとしきものと思ひつつ、初音の鼓を取り出して、また逢ふまでの籠と與へ、取り纏る靜を鼓の調緒をもて櫛の轆に結へ、ツト鳥居の彼方へと去るのだつた。

後に靜が身悶へして悲しむ所え、早見の藤太が軍卒を従へて寄せ來り、靜を引き立て様とするが、駈けつけた佐藤忠信に依つて救はれる。

と、義經が再び立ち出でて、忠信の武勇を賞し、まさかの時には吾が名を名乗る事を許し、且つ着長をも與へて

「……我は九州へ立越えて豊前の尾形を頼まん、汝は靜を同行して都に止まれ……」

と、命じ、名残りを惜しんで道を急いだ。

後に、悲嘆にくれる靜を、忠信がいろ／＼と慰さめ、共に都へ――。

嵯峨麿室の段

小松三位維盛の御靈若葉の内侍は、平家の一門都を落ちてより、若君六代君共々、此所北嵯峨の草庵に身をひそめ、馴れぬ佛の行に淋しき日をおくり迎へてゐた。

夫の生死も定かならぬ今、都を出で給ひし其の日を命日として、朝な夕な香華を手向けてゐるが、今日は丁度勇君小松内府重盛の祥月命日として、其の繪像をかかげ、今更の如く、此の殿さへ世に在さは、平家一門にも今日の悲

椎の木の段

豊竹つばめ大夫
豊澤仙三郎

口
竹本大隅大夫
鶴澤清二郎

一人形

若葉内侍 吉田榮三郎

六代君 桐竹小紋

主馬小金吾 桐竹紋十郎

女房小仙 吉田兵次

伴善太 吉田光次

いがみの權太 光之助改め 吉田光造

は、茶屋の女房に買物をたのんでやつた。見れば御道にある椎の大木には、木の實が澤山になつて居る。丁度其處を通りかゝつた人相のわるい男、小石を投げて椎の實を落すことを教へて呉れるので若君も大喜びで興に入つた。やがて茶見世を出て行つたその男は小金吾の風呂敷包みを取り違へて行つてしまつたのだ。小金吾は包を解いてみると中は張皮籠で違つてゐた。その男も立ち歸つて來て取違へへの塵相を詫びるのだつたが、自分の包が解けてゐるので、中をあらためると、祠堂金の廿兩が紛失して居ると云ひ出すのだ。小金吾には飛んだ迷惑の言ひ分だつた。武士に向つて、とは云つたが、その男は威猛高になつて、廿兩出せと云つて居る。さてはかたりだつたかと初めて悟つたけれど、世を忍ぶ御齋若君の御供をして居れば事あら立てるのも

却つて不利になると、それと知り乍ら廿兩をこの男に出すのだつた。御臺小金吾主従が行つてしまつたあと歸つて來たのは茶見世の女房だつたその名を小仙と云つた。いま小金吾から二十兩の金を衒り取つたその男は、いがみの權太と云ふ無賴者で、小仙を女房にして居り、二人の間には善太と云ふ男の子があつた。權太の父親は、この邊の釣瓶鮎屋の彌助の彌左衛門と云つて此の村でも中々口のきける律義者だつたが、權太の行跡が悪いので勘當同然にして居た。小仙は最前の權太の悪事を木の蔭ではら／＼して見て居たのだつたが、女房の意見など聞く權太ではなかつた。權太は是から又彌左衛門の留守に行つて、母親をだまして金をせびつて來るのだと云つて出かけて行つた。

小金吾討死の段

夕陽も既に傾いた。御臺若君の御供をした小金吾は下市村で朝方の追手のものに取かこまれてしまった。追手の將は猪熊大之進、何分多勢に無勢、と云つても、小金吾一人では中々叶ひ相もなかつた。御臺若君をかばひ乍らの奮戦に小金吾は重傷を負つてしまつたが、忠義の一心に猪熊を討つことが出来たのは天祐とも云ふべき不思議だつた。

然し手負ひの小金吾の命はもう追つて居た。寸刻も裕餘出来ない危機の御臺若君を落し申し、その後で小金吾の命は絶えたのであつた。其處を夜道の提灯をおぼつかなく通りかゝつたのは鮎屋の彌左衛門だつた。

今日庄屋に呼び出され、嵯峨の奥か

らこの村へ維盛の御臺若君が大前髪の供を連れて入り込んだ故、捕へて渡せと云ひ付かつたのである。

小金吾の死骸につまづいた彌左衛門は、行き過ぎ様として何と思つたか立ち戻り、捨てゝある披身を拾つて小金吾の首を打落し、提灯も吹き消して我が家へと急ぎ歸つて行つた。

釣瓶壽し屋の段

吉野路では名代の釣瓶鮎屋の彌左衛門の家には、平家の落人維盛卿が彌助と名をあらため世を忍ぶ身のその日を送つて居た。

彌左衛門の娘のお里は維盛の彌助に思ひを通はず様になり、彌助もお里にはその素性を明さず、何時かお里の婿になつて居た。

彌左衛門は維盛の父小松の内府重盛の恩になつた者で、その縁故から維盛

の爲には少からず心を碎いてゐたのである。

彌左衛門は未だ歸つては來ない。その留守を覗つてやつて來たのは、いがみの權太だつた。

權太は如何にもしほたらとした様子で、昨夜大盗人に遇ひ代官所へ上げる年貢の銀三貫目を盗取られ、言譯けなくお仕置にあはうより遠くの國へ立ち退きます、と母親にかき口説いた。氣の弱い母親はうまく、この權太のわなにひつ掛つてしまつた。親爺どのには内緒でと、權太に云ひ分だけの銀を出してやるのだ。何か入れ物と云つてよい思案もなし、店先に並べてある鮎桶の中へ銀を入れて持ち出さうとした。そこへ丁度、あたふたと歸つて來た彌左衛門に出合ひ、銀は鮎桶に入れたまま、其處へ並べて知らぬ顔をして奥へ隠れてしまつた。

主馬小金吾討死の段

豊竹呂太夫

豊澤仙糸

一人形

主馬 小金吾 桐竹紋十郎

猪熊 大之進 吉田玉徳

若葉 内侍 吉田榮三郎

六代 君 桐竹小紋

鮎屋 彌左衛門 桐竹政龜

取巻 犬ぜい

彌左衛門はあたりを見廻し、持つて歸つた小金吾の首を、そつと鮎屋の中へ入れて置いた。

夜も次第に更けて行つた。お里は寢仕度(しんど)に氣もそはくして居る。これを見るにつけ彌助(やえすけ)の維盛(いせい)はこの初心(しんご)のお里(うら)があはれでならなかつた。お里を先へ寢(ね)かせた維盛(いせい)は、遙(はるか)か都(みやこ)の空(そら)へ殘(こ)して來(き)た若葉(わかば)の内侍(ないじ)やわが子(こ)六代(むくろ)君(きみ)をなつかしく思(おも)つたのであつた。

時にほとくと門(かど)の戸(と)をおとなふ物音(ものね)で、それは女の聲(こゑ)で一夜(ひとよ)の宿(やど)を、と云ふのだつた。斷(ことわ)りを云(い)はんと門(かど)の扉(と)を明(あ)けて見(み)ると、月影(つきかげ)にそれとまがひもなく若葉(わかば)の内侍(ないじ)と六代(むくろ)君(きみ)であつた。も早(はや)寢(ね)入(い)つた様子(ようす)のお里(うら)の寢息(ねいき)を窺(うかが)つて維盛(いせい)は内侍(ないじ)六代(むくろ)君(きみ)を家(うち)の中(なか)へ密(ひそ)かに通(とほ)して、この不思議(ふしぎ)な親(おや)子(こ)夫婦(ふうふ)の對面(たいめん)の所(ところ)以(も)を聞(き)くのだつた。

若葉の内侍は、姿の變つた夫維盛の

身(み)なり貌(かたち)に涙(なみだ)した。維盛(いせい)もお里(うら)と假(か)りの契(ちぎ)りを結(むす)んだのは、娘(むすめ)の戀路(こいぢ)から大事(だいじ)の漏(も)れるのを愁(うれ)ひ、彌左衛門(やえすけ)にも口止(くちど)して我が身(み)の上(うへ)を明(あ)さず義理(ぎり)故諚(こざ)なく今日(けふ)に至(いた)つたと、譯(わけ)を語り聞(き)かせた。傍(わがはた)にお里(うら)は何時(いつ)か目(め)を覺(め)して、この物語(ものがたり)の始(はじ)終(つひ)を聞(き)いて居(ゐ)たのだつた。

お里はこらへかねてわつと泣(な)き出し内侍(ないじ)若葉(わかば)君(きみ)をまづくと上座(じやうざ)へ直(ただ)した。

さわり

私(わたくし)はお里(うら)と申(まを)して此(こ)の家(うち)の娘(むすめ)、いたづら者(いたづらもの)憎(にく)む奴(やつ)と、思(おも)ひ召(め)されん申(まを)譯(わけ)過ぎつる春(はる)の頃(ころ)、色(いろ)めづらしい草(くさ)中(なか)へ、繪(ゑ)にある様(よう)な殿御(とんでん)のお出(いで)、維盛(いせい)さまとは露(つゆ)知らず、女(おんな)の淺(あは)い心(こころ)から可(か)愛(あい)らしい、いとらしいと思(おも)ひ初(はじ)めたが戀(こひ)のもと。父(ちち)も聞(き)えず母(はは)も夢(ゆめ)にも知(し)らして下(くだ)さつたら、譬(たと)へこがれて死(し)ねばとて、雲井(うんゐ)に近(ちか)き

釣瓶壽し屋の段

切 豊竹古頼太夫

鶴澤清六

一人形

娘	お里	桐竹紋十郎
彌左衛門女房	吉田小兵吉	
下男彌助	桐竹龜松	
いがみの權太	吉田榮三	
親彌左衛門	桐竹政龜	
若葉内待	吉田榮三郎	
六代君	桐竹小紋	
村の歩き	吉田萬次郎	
梶原平三景時	桐竹門造	
女房小仙	吉田兵次	
伴善太	吉田光次	
取善卷	大ぜい	
町人	大ぜい	

御方へ、鯨屋の娘が惚れられうか、一生運添ふ御殿ちやと、思ひ込んで居るものを、二世のかためは叶はぬ親への義理に契つたとは、情ないお情に、あづかりましたとどうと伏し身をふるはして泣きければ……

其處へ来たのは村の役人、此處へ梶原様が見えまする、と云ひ置いて歸つて行つた。

維盛も内侍若君も、さてはいよく、運も盡きたかと覺悟をしたのであつたが、お里はさそくの機轉に親の隠居屋敷上市村へと逃がしたのであつた。

奥に様子を聞いて居たいがみの權太は、お觸れのあつた維盛夫婦六代君、捕へて褒美にありつかんと、止めるお里を蹴倒して、最前の銀を入れた鯨桶小脇に抱へ後を慕つて追つて行つた。この一大事に彌左衛門もお里も母親

もたゞ狼狽へるばかり、さう中ふ中にも梶原平三景時は矢管の提灯も嚴めしく、數多の家來に十手を持たせ入つて來た。

彌左衛門が維盛をかくまひ居ること訴人によつて明白、首打つて渡すか、但しは違背に及ぶか、返答如何に、と梶原は詰め寄つた。彌左衛門も腹を据え、隠しても隠されぬ故、既に維盛の首は打つてこの通りと、鯨桶を持つて出た。母親は最前權太が銀を入れて置いた鯨桶を出されては、と彌左衛門と云ひ争つて居る中、維盛夫婦俄鬼め迄

いがみの權太が生捕つたり、と聲高らかに呼ばはり乍ら、若君内侍を猿縛りに維盛の首を携へて來るのだつた。梶原は大満悦で、褒美には親彌左衛門が命救して呉れう。又頼朝公着出の陣羽織、鎌倉へ持ち來らば銀と釣替へに受ける、と陣羽織と引替へに繩付きをう

取つて悠々と歸つて行つた。

今まで耐へて居た彌左衛門は、憎し憎しと、隙をねらつて權太の脇腹を刀で刺し通した。權太はその刃物を抑へて云つた。

「こなたの力で維盛を助けることは叶はぬ」。前髪の首を彌助と云つて差出した所で、どうして梶原ほどの侍が瞞されませう、と云ふのだ。彌左衛門は最前の鉾桶を開いてみると中から出たのは銀三貫目だつた。これはと驚き、轡子を問へば、さつき權太が持つて行つた鉾桶を開いてみれば小金吾の首、これ程までに心を碎く父親の心を察しその前髪を剃り落して差出したのであつた。

權太が苦しい息に取出す一文笛を吹けば、物陰にひそんで居た維盛卿はじめ内侍六代君は、茶汲みに姿を變へて馳けつけて來た。權太が最前繩付きに

して梶原に渡したのは年頃も同じ權太の女房小仙と一子善太だつたのだ。

かく善心に立ち返つた權太を刺した父親は我が不明を悔んだ。權太は今までの親不幸のつぐなひに、我が妻、わが子を血を吐く思ひで繩にかけたのだつた。

維盛卿も感じ入り、頼朝への恨みの一と太刀と、最前の陣羽織を刺さんと取り上げると、内や床しき、内ぞ床しきと古歌の下の句が書いてあつた。何ごとと終目を裂いてみると、中には袈裟衣、珠數迄添へて入つて居た。

この謎は何だつたらう。その昔、小松の内府が頼朝の命を助けたことがあつたのだ。その恩返しと梶原に命じて維盛の命を助け、出家させ様と計つた頼朝だつたのである。

權太はこれを聞いて猶ほ悔んだ。たばかつたと思つた梶原に却つてたばか

られたのであつた。

今はの命の權太を後に、維盛卿は高野へ、内侍は六代君を高雄の文覺へ頼みに、彌左衛門を供に連れ發足するのだつた。

道行初音の旅路

◇床 本

「戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや忠とまことの武夫に君が情とあづけられ、いかがに忍ぶ都をば後に見捨て、旅だちて、つくらぬなりも義經の御行末はなにはづのなみにゆられてたゞよひて今はよしのと人づてのうはさの道のしほりにて大和路さしてしたひゆく。見わたせばよもの梢もほころびて梅がへうたふうたひめのさとの男が聲々にわがづまがてんじやうぬけてすえせん、ひるのまくらはずがもなや、天じようぬけてすへる

道行初音旅

静 御 前 竹本伊達太夫

呂賀太夫改め

狐 忠 信 豊竹松太夫

竹本津麿太夫

ツ ヲ 豊竹宮太夫

レ 豊竹松島太夫

豊竹千駒太夫

野澤喜左衛門

鶴澤友衛門

豊澤園伊三

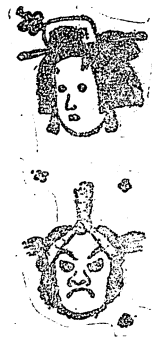
野澤錦糸

鶴澤清廣

竹澤園作

せん、ひるのまくらはつがもなや、ヲ
 つがもなや、おかしからすの一ふし
 に人も、わらやのそだちには春ははね
 つくてまり、ひいふうつくづくときけ
 ばこち風音をへて、こぞの水を徳若に
 御萬歳と君もさかへまします。あいけ
 ふありや、たのもしやさぞなやまとの
 人ならば御かくれがをいざ問はん、は
 れも初音の此つゞみ君のさかへを壽ぎ
 て、むかしを今になすよしもがな、う
 ぐひすもはつねのつゞみくしらべあ
 やなす音につれてつれてまねくさおく
 ればせなる忠信が旗すがた、せなに風
 呂敷をしかとせたらおふて野みち、あ
 ぜみちゆらりくかるい取なりいそい
 そとめだぬ様に道距て、女中の足と
 あなどつて囃お待かね、こゝ幸ひの人
 目なしとせいめいそへて賜はりし御き
 せながを取出し、きみと敬ひ奉る。
 静はつゞみを御顔とよそへて上におき

の石、人こそ知らぬ西國へ御げこうの
 御かいじよう、浪風あらく御船を住吉
 浦に吹上られ夫よりよしのにまします
 由、やがでぞ参り候はんと互ひにかた
 みをとり納め、鷹とつばめはどちらが
 可愛、ややを育つるづばめが可愛い、
 花を見すてるかりがねならば、ふみの
 便りも又の縁、エーそふじやいなく、
 唱ふ聲々面白や實に此鑑を賜はりしも
 兄繼信が忠勤也誠にそれよ越方の思ひ
 ぞ出る壇の浦の海に兵船平家の赤旗陸
 に白旗源氏の強者アラ物々しやと夕日
 影に長刀を引そばめ、某は平家の侍
 悪七兵衛景清と名乗かけくなき立て
 くなき立つれば花にあらしのちりち
 りぱつと木の葉武者言ひがひなし出や
 方々よ三保の谷の四郎是にありと渚に
 丁と打つてかゝる刀を拂ふ長刀のゑな
 らぬ振舞何れ共勝り劣りも波の音。打
 合太刀の鏝元より折て引汐歸るなり、



一人形

靜 御 前 吉田文五郎

狐 忠 信 吉田榮三

勝負の花を見捨つるかと言ひければ首の骨こそ強けれどハハ、ホ、ホ、ホ、笑ひし後は入亂れ手しげきはたらき兄織信君の御馬の矢表に駒をかけすへ立ぶさがるオ、聞及ぶ其時に平家の方には名高き強弓能登の守教經と名乗もあへ

ずよつびいて放つ矢さきはうらめしや兄織信が胸板にたまりもあへず眞逆縁あへなき最後は武士の忠臣義士の名を残す思ひ出るも涙にて袖はかほかぬつ、井筒いつか御身ものびやかに春の柳生の糸ながく枝をつらぬる御ちぎりなどかはくちをしかるべきとたがひにいさめいさめられ急ぐとすれどはかどらぬ芦原峠けうのさと、つちだむつだも遠からぬのちの春風吹はらひくもと見

まがふ三芳野の麓の里にぞつきにける。

川連法眼館の段

その後九郎判官義経は、鎌倉方の詮議も厳しく、身の置き所に窮した揚句吉野山の東光坊の弟子川連法眼の元に難を避けてかくまはれて居た。

狐の忠信を供に連れた靜御前は義経の後を慕つて、この川連法眼の館へ来てみると驚いたことには、もう一人佐藤忠信が既に來てゐるのだ。靜の連れて來た忠信には未だ會はないが、義経は何としても怪しいことゝ不審がつかつた。靜もさう云はれてみれば此處まで來る道々、拜領の初音の鼓を旅のつれづれに打つ度毎に不思議な様子をする忠信が訝しくてならなかつた。ある時は忠信と道にはぐれ、鼓を打てば何處からともなく現れる不思議さ。いま到着の

川連法眼館の段

中

竹本南都大夫

鶴澤重造

竹本織太夫

竹澤園六

友花改め

鶴澤燕三

野澤勝太郎

一人形

靜御前 吉田文五郎

源義經 桐竹龜松

龜井六郎 桐竹紋太郎

片岡八郎 吉田多三郎

佐藤四郎兵衛忠信 桐竹紋司

狐忠信 吉田玉助

菅の忠信を如何にさがしても、一向に見當らないのも亦、不可思議の一つであつた。

義經は靜に命じて初音の鼓を打たせ忠信の正體を見とゞけさせろことになつた。そして若し怪しいことあらばと一刀を渡された。

靜は鼓を打つた。清々としたその音につれ裏して忠信は現はれた。さてこそと靜が一刀を以て切り付けるその手を抑へる忠信。誓の忠信白狀せよと仰せを受けた靜が詮議、サア〜と責め立てられ遂に忠信は、その本性を明すのだった。

その昔桓武天皇の御代、内裏に雨乞の行事があつた。その折大和の國に千年の功經る牡狐牡狐が狩り出され、その皮で鼓が作られた。この鼓を打つと降る雨に民百姓も潤はつたと云ふのである、これを初音の鼓と名付けた。

忠信は實は、その牡狐牡狐の子であつた。この度初音の鼓が義經の手に渡るより親戀しさに子狐は鼓につき従つて居た去りし日稻荷の森で義經が忠信

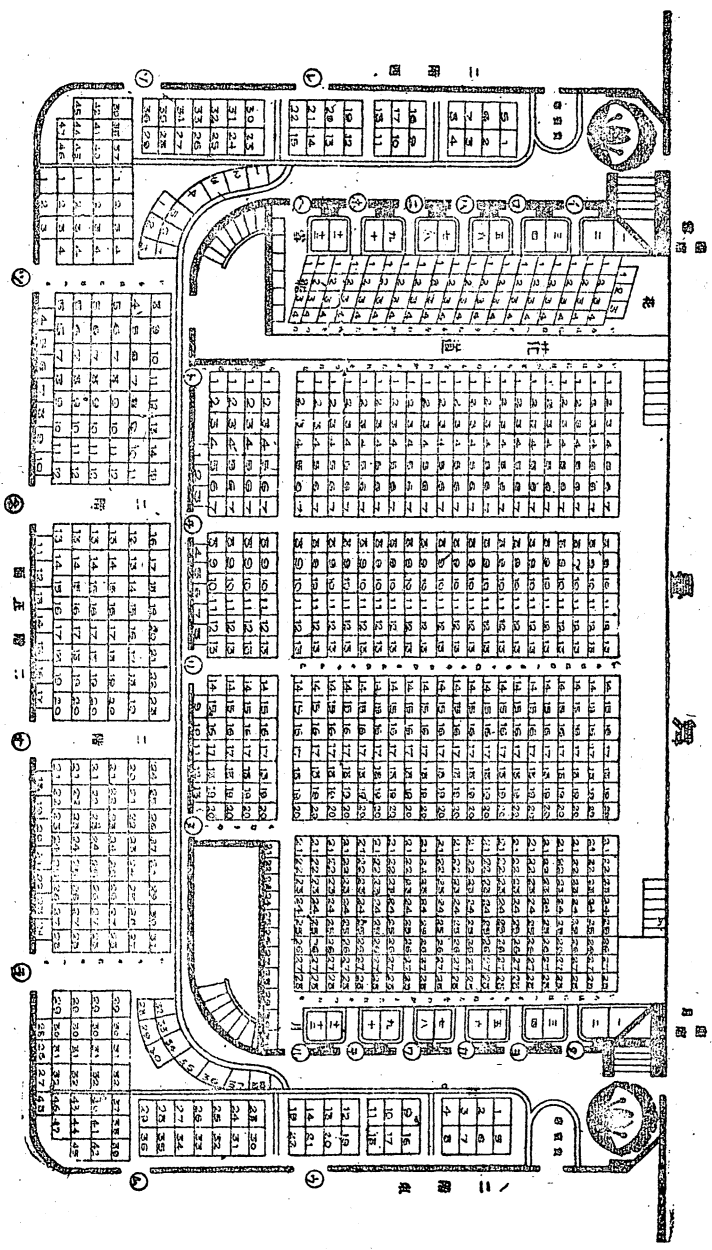
の居ないのを悔んだのを聞いて、子狐は忠信の姿となり、以來靜御前に従つて此處まで來たのだつた。そして鼓の音は畜生ながら兩親の聲と聞え、それに呼び返され幾度か靜の元へ戻つたこともあつた。

今靜が打つ鼓の音は、兩親が元の古栖へ歸れとの聲ゆへ、もうお別れ致します、今迄大將のお目を掠めし段々、お詫びなされて下さいませ、と狐の忠信は涙ながら暇乞ひをし、又なつかしい鼓の父母に悲しい別れを告げるのだつた。

この様子を見た義經は狐の心根が不憫でならなかつた。狐は義經を伏し拜み乍ら消え失せた。あれよび返せ、御説あつて靜は又も鼓を打つたけれど、鼓は音もせず親子の別れを悲しんでせぬ鼓の不思議さに靜は涙にくれたのであつた。其處へ再び姿を現はした狐に、義經は初音の鼓を與へた。こがれ慕ふ親の鼓を有難く頂いた子狐は、義經を何處までも守護なさんと誓へ勇んで姿を消して行つた。

新橋灣舞場座席圖

舞場座席圖



開場毎に篤き御愛顧を賜り謹んで御厚禮申上げます

當劇場は諸事皆様の御期待に反かね様懸命に努力致して居りますが、何事によらず皆様直接の貴重なる御言葉を頂きたく存じます。

「劇場御使用に就て」劇場を各種の御催し、例へば演劇公演、音楽會、舞踊公演、お浸ひ、温習會、發表會、披露會、祝賀會、慰安會に御利用下さる様御願ひ申上げます。

お願ひ

- 一、お席の番號 を御自宅にもお印し置き下されば御急用御呼出しに御便利で御座います。
- 一、お帽子 は椅子の下へ。御婦人方の庇の廣いお帽子は後ろの人の邪魔になりますから、御遠慮願ひます。
- 一、御貴重品 はお席へお置きにならぬやう。
- 一、御携帶品 は預り所へ。
- 一、御食事 は一幕前に御申付た。
- 一、喫煙 及び御食事は観客席では固くお断り致します。
- 一、御氣分の悪い方は係員に御申出な。

一、お忘れもの 御紛失は直ちに係員へ御届を。

一、寫眞撮影 當場内では特定寫眞班以外は固くお断り致します。

一、汽車の時間 は萬承り所へ。

一、お電話 は一階右側預り所、公衆電話は一階東西に御座います。

一、御履物 御傘などは必ず一幕前に御受取下さい。

一、係員の不行届 場内設備の缺點は御遠慮なく御申聞け下さる様。

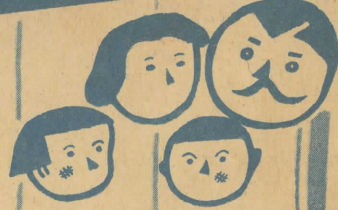
一、俄雨の際 はお客様の爲に簡便な方法で雨傘の用意がしてございますから何卒係員に御申出下さい。

一、舞臺上 大道具照明其他にお氣付の點は何卒御教示を願ひます。

京橋區木挽町 新橋演舞場

支配人 藤井麟太郎

スプロッド油肝^{ミツワ}



一家総はりきり

無病息災

戦場は吾々の身近かに續いております。最後の勝利を

確保する迄、一億同胞みな健康であらねばなりません。増産に挺身する人も勉學する人も、家庭を護る人も、こぞつて張り切つた生活をいたしませう。

不足しがちな栄養を総合的に攝取する必要があります。本劑は各種の栄養素を多角的に含有し且つ完全乳化してありますから胃腸障害を起す心配もなく吸収いたします。

毎日一顆——二顆

ミツワ石鹼本舗藥品部

許 特 賣 專

ラオゼ

磨 齒 用 薬



生活の
科學化は
手近から

親しまれて
いる歯磨の科學化こそ手近で且
も必要なる事です。徒らに遠大な物を希まづ
私共の生活に科學性を取入れる事は、最
とも、まづ最も身近にあるものから心がけ
るべきで、例へば、朝に夕に私共の生活に
つ有効的です。

主劑ゼオライトの持
つ吸着・置換・收斂
の三大科學作用は豫
防齒科醫學多年研究
の所産であり、齲齒
齒槽膿漏の完全豫防
と同時に、咀嚼力を
強化いたします。

こんなお方は
せひせオラを

- 1 齒を強く美しくと望む方
- 2 林檎を噛むと血の出る方
- 3 齒刷牙を使ふと血の出る方
- 4 むし齒が多くて御困りの方
- 5 咀嚼力が不充分で困る方
- 6 在來品に御不満の方

錢八廿 共稅

⊗ 定價部金貳拾錢

部 品 藥 舗 本 館 石 ワ ツ ミ